

坂口安紀 編

『二〇一二年ベネズエラ大統領選挙と地方選挙』

— 今後の展望 —

情勢分析レポート No. 211 アジア経済研究所



二〇一二年一〇月以降ベネズエラは激動の一年を経験した。同年一〇月には「二一世紀の社会主義」を標榜するウーゴ・チャベス大統領が四選を果たし、二〇年

に及ぶ長期政権化の道筋をつけた。しかしながら、わずかその一カ月半後には癌再発を公表し、摘出手術を受けるべく急遽キューバに旅立ち、それを最後に一度も国民の前に姿をみせたり声を聞かせることがないまま、そして新任期の就任することもないまま、今年三月五日に死去したのである。チャベス大統領の死去を受け、四月一四日に再度大統領選挙が実施され、短い選挙戦のあと、チャベス大統領によって後継指名されたニコラス・マドゥロ副大統領(当時)が僅差で勝利をおさめた。数年前からささやかれていた「チャベスなきチャベスタ(チャベス派 政権)」がついに誕生したのである。

本レポートは、当初は二〇一二年一〇月の大統領選挙および二月の地方選挙の結果とその後の展望を分析するために、ベネズエラ研究者三人を迎えて組織された機動研究会の成果であ

る。大統領選挙後にカラカスで集中的に議論をし、それぞれの研究者が担当章の執筆にかかっている最中にチャベス大統領の癌が発表された。しかし大統領の病

状について情報が制限されたため、チャベス大統領の病状(すなわち政治的展望)がまったく不透明な状態で、本レポートは執筆を余儀なくされた。

とはいえ、いずれにせよ大統領選挙と地方選挙に関する情報や分析内容に変わりはないこと、またそれらは状況がどのように転じようとも短中期的展望を見据える際に重要な情報と視点であることには変わりがないことから、予定どおりの内容で発表することにした。チャベス大統領死去直後の三月三日には当研究所のウェブページで中間報告を発表しているが、本レポートはそれに大統領死去、再選挙、マドゥロ政権の誕生と展望を序章にて大幅加筆したものである。

本章の構成と内容は以下のとおりである。序章では、二〇一二年大統領選挙がなぜ国内外から大きな注目を集めるものであったのかという背景、そし

て上述のようにチャベス大統領の癌再発からマドゥロ政権誕生までの経緯を説明している。続く第一章では、大統領選挙の背景として、なぜチャベス政権下でベネズエラ社会は二極化を深めているのかを、チャベス大統領の政治ビジョン、社会政策、そして経済政策とマクロ経済情勢から説明する。第二章では、選挙の背景として、ゲームのルール、すなわち選挙法・制度について解説する。ここでは、チャベス政権下では多数派(チャベス派)グループに有利になるような選挙制度改革が行われてきたことが示された。第三章では、二〇一二年の大統領選挙と地方選挙の選挙キャンペーン内容について分析している。チャベス派のキャンペーンが公的資金や各種国家組織(公務員、国営放送など)を大規模に動員した不正なものであったことが指摘された。

また両陣営のキャンペーンの違いとして、チャベス陣営はチャベス大統領の力リスマを利用し、支持者らの感情に訴えかけ、チャベスと支持者らの間に直接的紐帯を築くことで支持を固めようという戦略であったこと、一方反チャベス派は、治安や住宅問題など国民が直面する諸問題に対する具体的解決策を示すテクノクラートのキャンペーンを行っていたことが指摘された。第四章では、選挙の結果分析からいくつか興味深い点が指摘されている。第一に過去の選挙と比べてチャベス(派)候補の得票率が大きく低下傾向にある一方、反チャベス派が得票率を伸ばしていること、第二にチャベス大統領は自党単独では反チャベス派の

カプリリス候補の得票率に及ばず、共産党などの選挙同盟によってかろうじて勝利していたこと、などである。

終章では、今後の中長期的シナリオを規定する要因として、①チャベス陣営の結束の維持が弱体化、②反チャベス派の結束の維持が弱体化、③国内経済情勢と国際石油価格の推移、④国際社会の関与、が挙げられている。これらはチャベス大統領が癌再発を発表する前に四人の執筆者で議論して導き出したものだが、チャベス死去、そしてマドゥロ政権誕生後の情勢においても、変わらず有効な分析の視点となっている。

チャベス大統領という個性の強い政治リーダーの登場で、ベネズエラは海外からも注目を集める国となった。とはいえ日本ではまだまだ情報が少ないベネズエラ情勢について、わかりやすく情報提供することを目的として本書を企画した。本書がベネズエラ理解の一助になることを編者・執筆者一同願っている。

(さかぐち あき/アジア経済研究所
ラテンアメリカ研究グループ長)